

## スポーツ議員の是非とその可能性

### Diet member from famous athletes -their Achievements & Future possibility-

1K08B143 西 将輝

主査 武藤泰明先生 副査 間野義之先生

スポーツ界から政界にチャレンジする者が増加傾向にあることの理由を明らかにし、スポーツ界出身の人間が政治に参加することの是非について考えることが本論文の目的である。そのためにスポーツ界出身の政治家が生まれるに至った背景をたどり、彼らに対する是非の意見を集めて考察していく。

本論文ではスポーツ界出身の政治家をスポーツ議員として定め、扱う範囲を国会議員に定めることとする。なぜならば現状では一般的にスポーツ議員はタレント議員と同列として考えられ両者を区別する言葉が無く、地方の政治まで範囲を広げると把握しきれないほどの人数になるからだ。

スポーツ議員はタレント議員の一種として生まれたと言える。戦後間もない選挙では組織票を持つ人物がより多くの票を集め国会議員となる傾向が見られたが、時代の流れと共にメディアが発達し、知名度の高い人物が台頭してきた。1962年にタレント議員のはしりとされる藤原あきが当選した後はその流れが定着し、職業政治家とは別の様々な分野から政治家となる者が続々と出てきた。スポーツ議員はこの流れの中で徐々に数を増やしている。タレント議員もスポーツ議員も選挙制度の影響を受けるため、ある期間で人数の増減こそあるものの全体的に見て近年増加傾向にあると言える。選挙はその時代の社会を反映する。スポーツ議員が増えてきたことは、日本においてスポーツの価値が高まってきていることに起因する。

スポーツ議員の是非に関しては、未だに否定的な意見が多く見られる。しかし批判が多い中でもスポーツ議員が誕生しているということも事実である。反対する者としては、スポーツ議員がそもそも政治に関して素人であるという点が大きなネックになっているようである。また、過去のスポーツ議員が選手と政治家の二束の草鞋を履いた例に対しての批判が多く見られる。

しかし私は是とする意見のほうが民主主義の観点から考えると理にかなっていると考えた。そもそも民主主義の政治とは、政治の素人であっても物申すことができるはずの政治体系である。加えて昔に比べて自由な気風がある現代社会においては、政治のプロだけでは議論が進まないような多様な政策が求められる。スポーツ議員が民主主義社会の政治家たる条件を備えているのであれば政治家になることに異論はない。仮にそのスポーツ議員が政治家として不十分な実績しか残せないのであれば、次の選挙で投票しなければいいのである。その点ではスポーツ議員を当選させた以上、その責任は有権者にも有って然るべきである。政治に無関心な者がこぞって投票することで「当選してしまう」とは言われるが、政治家になった以上は各々が掲げた政策を実行することは最低条件である。

ではスポーツ議員ができること、スポーツ議員だからこそ可能性があることとは何か。もちろんスポーツの政策は現代では必要なものであるし、そこに現場の最前線にいた経験があるスポーツ議員が加わることは有益だろう。しかしこれはスポーツ議員ならば当然求められ得ることであって、可能性ではない。国民が密かにスポーツ議員に期待するのは、一流のスポーツ選手が持つヒーロー性を現代の滞った政治の世界で発揮してくれることではなかろうか。アントニオ猪木がかつてそうしたように、膠着状態の現代の政治を一般の政治家とは異なるアプローチから解決へと導く可能性がある人物が722名の政治家の中に現れることを投票者が期待していると解釈したならば、スポーツ界で名を馳せた者に政治家として声がかかるのも納得できる。

我々はスポーツ議員をただ異質なものと否定するのではなく、日本の民主主義が成長した産物であるとして受け入れ、今後の活躍に期待すべきである。